

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：35502

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19978

研究課題名（和文）スポーツ・インテグリティ教育促進のための研修プログラムデザインの開発と実践

研究課題名（英文）Educational program for Athlete's Integrity of Sports -

研究代表者

岡井 理香（RIKA, OKAI）

周南公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：40816104

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多様なスポーツ参画者を対象に、スポーツの本質的な意義と価値を学び考え、スポーツ・インテグリティに関する「知識・理解」、「思考・判断・表現力」、および「学びに向かう人間性」を高める教育を促進することを目指した。その研究成果として、日本オリンピック委員会、日本スポーツ振興センター、日本スポーツ協会、中央競技団体、地域タレント発掘事業および地方公共団体から収集した情報と、各教育現場のニーズを踏まえ、4年間で計約300名のアスリートを目指す児童およびその保護者、約130名の教職学生、約550名の一般学生を対象に上記の教育プログラムを実施した。本教育実践は2023年度も継続実施中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

4年前と比較して、「スポーツ・インテグリティ」という言葉と考え方は社会に浸透してきた。しかしながら、「スポーツが様々な脅威により欠けることなく、価値ある高潔な状態」を目指すスポーツ教育を促進する上で、研究開始当初から現在に至るまで、スポーツ・インテグリティ教育に関する学術的な研究や報告はほぼ皆無である。また、スポーツに関する基本的な学習事項として、保健体育科教育の中でスポーツ・インテグリティをとり扱うことを考えた時、体育理論領域の研究自体が少ない上に、初等・中等・高等のスポーツ教育実践者・研究者らによる検討は現在も進んでいない。今後、本研究の成果を広く発信し、現状の打開に務めたい。

研究成果の概要（英文）： This study aims at discussing the principles and significance of sports, and promoting sports education which cultivate “solid academic prowess,” “knowledge and skills of thinking capacity, decisiveness, and expressiveness,” and “good player and coach” about sports integrity.

As the result of this study, educational programs for 360 pupils in total and students whose future aspirations are athletes, 100 students in a university teacher-training course, and 550 university students, were designed and conducted based on the data collected through National Olympic Committee, Japan Sport Council, Japan Sport Association, National Sports Federation, Worldclass Pathway Network and the demands from educational institutions. These educational practices are being carried out in the 2023.

研究分野：身体教育学

キーワード：スポーツ 体育科教育 スポーツインテグリティ 教職課程 教師教育 アスリート育成パスウェイ 教育プログラム 高等教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控えた平成 29 年、文部科学省が策定した第 2 期「スポーツ基本計画」において、スポーツ・インテグリティの保護・強化が政策目標として掲げられた。その背景には、ハラスメント、暴力行為、ガバナンスの欠如、ドーピングなど、日本のスポーツ及びスポーツ団体における健全性に起因する不祥事や不正などの問題事案が相次ぎ発生・発覚している状況があった。

本研究に着手した 2018 年、上記の現状に対して、スポーツ庁はクリーンでフェアなスポーツの推進に取り組むことを喫緊の課題として挙げ、「スポーツが様々な脅威により欠けることなく、価値ある高潔な状態」を目指すことを示した。この流れを受け、日本スポーツ振興センター、日本スポーツ協会、日本オリンピック委員会等、日本の各スポーツ統括組織は、それぞれの立場と役割において、スポーツ及びスポーツ団体の健全性を保ち、それらの価値を向上させ、社会の中で存続・発展させるための事業展開を強く求められていた。

上記の社会背景の下、体育科教育、教師教育、およびアスリートパスウェイの研究領域で教育活動に務める筆者の立場として、スポーツの本質的な意義や価値を問い、学び、考えるインテグリティ教育を促進することが急務であったことが本研究の着想に至った経緯である。研究開始当初、日本オリンピック委員会によってスポーツ・インテグリティに関する研修会が実施されていたものの、対象は一部のトップアスリートとコーチに限られ、その内容自体が多くの方に開かれたものではなかった。そこで筆者は、日本におけるスポーツ・インテグリティ教育について、学校教育機関や地域のスポーツクラブで可能な教材と研修デザインおよび教育プログラムを開発・実践することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、スポーツに親しむ多様な児童・生徒・学生がスポーツの本質を学び考えることのできる機会を創出し、Well-being の観点からスポーツに関する「知識・理解」、「思考・判断・表現力」、および「学びに向かう人間性」を高めることを目指す。そのために、学校教育機関や地域のスポーツクラブにおいて使用可能な教材と教育プログラムを開発・実践を通して、日本におけるスポーツ・インテグリティ教育を促進することを目的とした。

3. 研究の方法

体育科教育、教師教育、アスリート育成パスウェイの 3 観点から、下記 3 点の研究教育活動を行った。詳細は「4. 研究成果」に記す。

- 1) 日本のスポーツ・インテグリティに関する教育的アプローチに関する情報収集
- 2) スポーツ・インテグリティに係る研修デザインおよび教育プログラムの開発・実践
- 3) プログラムの評価検証

4. 研究成果

【2019 年度】

スポーツ・インテグリティ教育における現状と課題を掌握することを目的に次の 3 点に取り組んだ。

- 1) 日本スポーツ振興センター、および日本オリンピック委員会の「トップアスリート、もしくはトップアスリートを目指すタレント・指導者・保護者」を対象とする教育・研修プログラムの方針と実施内容に関する情報収集。
- 2) 日本スポーツ協会のコーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム・コンピシーリストを基に質問紙調査を作成し、地域スポーツ指導者を対象とする調査を実施。
- 3) 地域のスポーツアカデミーにおいて、小学生 3、4、5 年生 90 名を対象にスポーツ・インテグリティ教育プログラムを実施。

以上の結果、以下の 3 点が明らかとなった。

- 1) トップアスリートと競技団体の強化コーチに対するスポーツ・インテグリティ教育は日本のスポーツ界における喫緊の課題として注力され、日本オリンピック委員会が主催する研修の必須の項目として展開されている。しかしながら、その内容についてはメディアや SNS、ドーピングが中心であり、スポーツの本質的な価値や意義にふれ、個々がスポーツの誠実性・健全性・高潔性を深く考え、追及するプログラムは管見の限り行われていない。
- 2) アスリートを育成する上でファーストコーチとなる可能性が高い地域指導者の 40%以上がスポーツの意義や価値（スポーツの概念や歴史、文化的特性、社会へ影響等）についての指導を行っておらず、スポーツのインテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）とそれを脅かす要因について、具体的な事例を挙げて説明することができない状況である。

- 3) 小学生や中学生年代の地域のスポーツタレントを対象に各都道府県が主催する教育プログラムの中にスポーツ・インテグリティは位置づいておらず、誰がどのように整備・実施していくかの見通しは立っていない。

【2020 年度】

中等教育の体育科教育において、スポーツ・インテグリティに関する知識・理解、および思考・判断・表現力を高める授業を実践することを目指した調査、および教育実践を行った。対象は、スポーツ科学系の大学にて中学校・高等学校の教諭第一種免許状(保健体育)の取得を目指す教職課程の学生とし、保健体育科教育法、および教職総合演習の履修生計 94 名に、「中学校・高等学校で受けた体育理論の授業」と「スポーツ・インテグリティに関する知識・理解」に関する調査を実施した(有効回答者: 85 名, 90.4%)。また、そのデータを基に、自身の授業内でスポーツ・インテグリティに関する授業を実施し、学生の知識と理解を深めた上で、学生自身が授業を実践することのできる教材研究と教材づくり、および演習を行った。調査の結果、以下の 3 点が明らかとなった。

- 1) 中学校時の体育理論の授業について、内容を明確に覚えていると回答し、その具体的な内容を記すことができた者は 85 名中 4 名(4.7%)、高等学校の体育理論については 10 名(11.8%)であった。
- 2) 中学校、および高等学校における体育の授業で既習の事項については、回答者が多い順の 3 項目として「ドーピング」、「スポーツが体と心に及ぼす影響」、「スポーツのルールとマナー」が挙げられた。
- 2) スポーツ・インテグリティという言葉に対しては、9 名(10.6%)が既知であり、大学の授業で聞いた者、高校の授業で聞いた者が各 3 名、その他の情報源が 2 名であった。

これらの結果を踏まえ、教師教育の観点から、体育理論、とりわけスポーツ・インテグリティに関する授業を深化していくことの必要性、およびその内容と授業実践に関する情報共有の重要性が示唆された。

【2021 年度】

2020 年度に引き続き、中等教育の保健体育科教育におけるスポーツ・インテグリティ教育を検討することを目的に、教師教育の実証的研究を行った。対象は、スポーツ科学系の大学にて中学校・高等学校の教諭第一種免許状(保健体育)の取得を目指す教職課程の 39 名の大学生とし、「スポーツ×体育理論」「スポーツ×SDGs」「保健体育×SDGs」の観点から、『スポーツの本質的な意義と価値』と『スポーツ・インテグリティ』を学び、考えることを主題とする教材研究と教材づくりを演習形式で行った。本プログラムでは、以下の 2 つの課題を設定し、個人思考と協同学習のサイクルを適宜くり返すことで各自とグループの知識・思考・表現の深化を目指した。

【演習課題 1】4 人 1 組でグループを編成。4 人の協同により上記をテーマとする授業を制作し、リレー方式で 50 分の授業を完成・実践する。

【演習課題 2】SDGs の計 17 のテーマにおいて、「3. すべての人に健康と福祉を」および「4. 質の高い教育をみんなに」の 2 テーマは保健体育科教育に共通テーマに設定し、プラス 1 テーマを選択。各テーマ 2-3 人のグループを編成し、すべての SDGs テーマを網羅する形で授業づくりに取り組んだ。課題 2 における本授業実践は個人単位とし、1 人 1 つの授業を作成、制作授業は YouTube にて履修生全体で共有した。

上記の両課題における各グループおよび個人の教育実践は、教職生同士の授業参観を経て相互に評価、その後自他の授業分析と評価のフィードバックを基にグループワークによって毎時改善の手続きが検討された。これらの 2 つの課題を通して、自他の授業分析を行うとともに、様々な視座・視野・視点からスポーツを考察し、教育現場での実践力を養うことを目指した。

【2022 年度】

日本スポーツ振興センター、日本スポーツ協会、大学スポーツ協会、教育関係者等を対象に、スポーツを通じた教育実践に関する情報収集を行うとともに、高等教育における健康・スポーツ科学領域の教養教育として、計 374 名の大学生を対象にスポーツ・インテグリティをテーマとする教育プログラムを計 6 回実施した。また、日本スポーツ振興センターワールドパスウェイネットワークに属するジュニアアスリートアカデミー 2 団体において、約 90 名の小学生を対象に教育プログラムを担当し、アスリートを目指す上で必要かつ効果的な教育実践について関係者と検討を進めた。これらの教育実践は 2023 年度も継続的に実施しており、各プログラムの成果と課題の検証を踏まえて、スポーツの本質が損なわれることなく、安心・安全にスポーツに関わり、親しむための知識・理解、思考・判断および表現・行動力を高める教育・教材開発に取り組んでいる。

研究期間の 4 年間に、初等・中等・高等教育、教職課程・教師教育、アスリートの育成、

競技団体という異なる視座・視野・視点から、各発育発達段階と各立場に応じて求められるスポーツの価値教育を検討し、学校教育機関とスポーツの現場の双方において多様な教育実践を行った。また、産学官の各スポーツ関係者・教育者と「スポーツを通じた教育活動」について、情報共有および意見交換を行い、連携・協同しながらスポーツ・インテグリティ教育の推進を目指す体制を構築することができた。本研究をスタートした2019年から4年経過した現在でも、スポーツ・インテグリティ教育に関する学術研究・報告は管見の限り極めて少なく、本研究での教育実践と成果を今後広く発信していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岡井理香 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 道徳教育を意識した体育理論の授業 - スポーツインテグリティの観点から - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 42-45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 岡井理香 |
| 2. 発表標題 独）日本スポーツ振興センター委託事業アスリート育成パスウェイの戦略的支援 -平成28年度JAPAN RISING STAR PROJECTに関する調査報告- |
| 3. 学会等名 日本体育学会第70回大会（於慶応大学） |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|